



Title	日韓の中等教師の葛藤経験に関するナラティブ探求— 多文化教育現場をめぐって—
Author(s)	金, 世貞
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96200
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 金 世 貞 ）

論文題名

日韓の中等教師の葛藤経験に関するナラティブ探求
—多文化教育現場をめぐって—

論文内容の要旨

本研究は「多文化」に関するナラティブ研究であり、研究者が韓国人として、日本に暮らす留学生として、そして教師としての経験を重ねるうちに生じた、社会文化的に類似する特性を基盤にしながら急速に多文化社会へと移行している日本と韓国の学校現場において「多文化」に直面した教師たちが経験している問題への関心から始まっている。

日本と韓国は同様に多文化社会を迎えているが、「単一民族」という民族的イデオロギーが長い間重要な文化的基盤として定着してきたという類似した特徴を持っており、これは両国の教育的な議論に対しても多くの影響を及ぼしてきた。特に中等学校までの義務教育を定めている両国（日本の場合は中学校まで）では、このような社会変化にともなう学校内の多文化化や教育問題に関連して教育対象、教育方法、教育内容などの側面で様々な議論と研究が行われてきたものの、「教師」を対象とした研究の数は依然として少ない。したがって本研究では、日本と韓国の教師が「教師」という存在として多文化教育現場において直面する葛藤経験を明らかにし、その葛藤経験が持つ意味を探ることから現在の学校教育現場に示唆を与えることを目的としている。

本研究における研究参加者の選定は、意図的サンプリング方法を用い、両国において多文化教育に関する議論や政策的努力が相対的に活発とされている日本の大阪と韓国の京畿道において勤務する中等教員各3名とした。また、面談回数は研究参加者の資料の内容や質によって個人間で4回から6回までの幅があり、面談時間は一回あたり最低一時間から一時間半ほどで実施された。

本研究を通じて研究資料収集や分析を行った結果、日本と韓国の教育現場において両国の教師たちが体験している内的葛藤経験の様相が明らかになり、それら内的葛藤経験の意味を解釈するうえで、両国の教師の内的葛藤経験の意味を同じカテゴリーに束ねて理解することができ、そのことから両国の教師が同一な「教師」という存在として多文化教育現場において体験する内的葛藤経験の背景を同様に捉えられることが明らかにされた。本研究では、両国の教師が抱える内的葛藤経験の意味カテゴリーを「障壁を前に出口を探す」、「不慣れがもたらす混乱」、「反省と振り返り」、「離島での疎外感」、「回避から恐怖と憎しみへ」の五つとしてまとめている。

異なる環境の中で多文化教育を実践している両国の教師たちが同一な「教師」という存在として、多文化教育現場である学校において体験する内的葛藤経験や意味が共通した様相を見せていることを明らかにした本研究の新たな知見は、急速に多文化社会へと移行する社会で見られる「教師」としての経験は類似する可能性があるという点を示している。さらに、主に「教育を受ける者」を中心に行われてきた既存の多文化教育研究に対して、多文化教育における重要な主体である「教育を行う者」に焦点を当てた研究の必要性を強く示唆するものである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (金 世 貞)			
論文審査担当者	(職)		
	氏 名		
	主 査	教授	志水 宏吉
	副 査	教授	高田 一宏
	副 査	教授	澤村 信英
論文審査の結果の要旨			
<p>本研究は「多文化」に関するナラティブ研究である。社会文化的に類似した特性を基盤にしながら、ともに急速に多文化社会へと移行している日本と韓国の学校現場において、「多文化」状況に直面した教師たちが経験している内的葛藤が考察の主題となる。</p> <p>上述の類似した状況とは、単一民族国家というイデオロギーが長期間にわたって重要な文化的基盤となってきたということである。両国では、社会変化にともなう学校内の多文化化や教育上の諸問題に対して、個々の「教師」を対象とした研究は依然として少ない。本研究では、日本と韓国の教師（合計で6名）が、「教師」という存在として多文化教育現場において直面する葛藤経験を明らかにし、その葛藤経験が持つ意味を探究した。</p> <p>対象者の選定にあたっては、意図的サンプリング法を用いた。両国において多文化教育に関する議論や政策的努力が活発とされている日本の大阪と韓国の京畿道において勤務する中等教員各3名ずつを聞き取りの対象とした。とした。対象者に対する面談回数は4回から6回までの幅があり、面談時間は一回あたり最低1時間から1時間半ほどをかけた。</p> <p>分析の結果、日本と韓国の教育現場において両教師たちが体験している内的葛藤経験の様相が明らかになった。本研究では、それを「障壁を前に出口を探す」、「不慣れがもたらす混乱」、「反省と振り返り」、「離島での疎外感」、「回避から恐怖と憎しみへ」の5つのカテゴリーに整理している。</p> <p>本研究において、異なる環境の中で多文化教育を実践している両国の教師たちが同一な「教師」という存在として、多文化教育現場である学校において体験する内的葛藤経験やその意味は共通した様相を見せていることが明らかとなった。これまでの多文化教育研究は、主に「教育を受ける者」を対象としてなされてきたが、多文化教育における重要な主体である「教育を行う者」に焦点を当てた研究の必要性が本研究によって強く示唆された。</p> <p>本研究は、近年社会科学の諸分野で注目を集めつつあるナラティブ探求という方法を日韓の中等教員に適用した注目すべき試みであり、導き出された5つのカテゴリーは、多文化教育実践にかかわる教師研究の嚆矢ともいえる内容を有するものである。以上のことから、本論文は博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断する。</p>			